

但馬牛の基幹種雄牛のラインナップが充実！！

(雌牛の系統・能力に合致した最適の種雄牛を選定できます)

【背景・内容・成果】

但馬牛の改良では他県から種牛を導入しない閉鎖育種を実施して「のれん」を守っています。そのため、複数の系統※(城崎系:G1~G4,中土井系:G5~G7,熊波系:G8)を確保する必要があります。

平成20年度後期の検定により「菊西土井」、「鶴神土井」と「茂広波」3頭の種雄牛が加わり、今後の但馬牛を担う各系統の種雄牛ラインナップが充実しました。

新しくデビューした種雄牛の特徴

菊西土井



脂肪交雑基準値(BMS)と枝肉重量の育種価が歴代3位と産肉能力のバランスが良い質量兼備の種雄牛(G7)

鶴神土井



脂肪中のモノ不飽和脂肪酸の割合が歴代種雄牛トップで、良質な脂肪質の種雄牛で肥育農家から期待されている(G7)

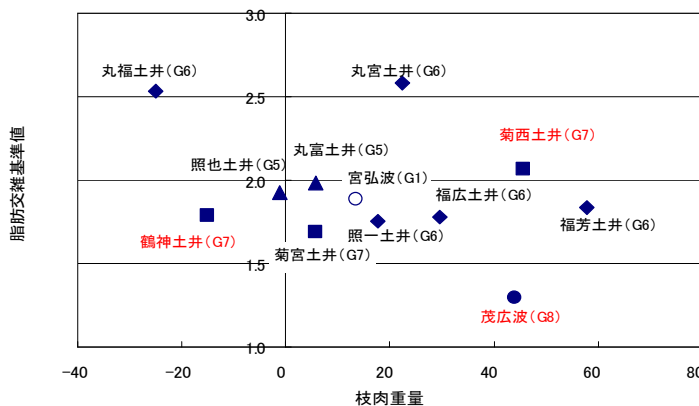
茂広波



熊波系種雄牛では歴代トップのBMSを示し、枝肉重量も大きく、中土井系の雌牛との交配で近交係数を15%前後まで低下できる(G8)



基幹種雄牛(12頭)育種価の分布



左図は、縦軸に脂肪交雑基準値(BMS)、横軸に枝肉重量の育種価を示しています。

これまでは、G1、G5やG6系統で優秀な種雄牛が選抜されていましたが、今回の種雄牛は、G7とG8の種雄牛で、概ね全系統の種雄牛がそろいました。

※: 遺伝的な多様性を確保するため、複数の系統に区分(G1~G8と命名)して育種を行っています。これにより、血の偏りを防ぎながらの育種や現場での効果的な交配による優良子牛の生産が可能になりました。

【技術の活用】

今後も農家の収益性を向上していくために、血統的な特徴を保持しつつ、産肉能力や種牛能力の向上を目指した種雄牛造成を進めていきます。